
無限の世界で旅をする

ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限の世界で旅をする

【Nコード】

N7080Z

【作者名】

ソラ

【あらすじ】

ここは、有りえるかもしれない世界が街として存在し、無限に集約されている世界。物語の主人公は、そんな世界にたった今生まれただけの少女。少女の物語を淡々と紡いでいきます。

はじまり

唐突に、意識が覚醒した。

いや、意識が生まれたというのが、正しいかもしれない。何故なら別に寝ていたわけでも、気を失っていたわけでもないからである。そのような記憶も無いし、そもそも自身の記憶というものが全く無い。しかし、そのことを不思議に思うことは無かった。たった今自分が生まれた事を、何故か理解していたからである。そして自分は生まれた瞬間から多少の知識を持っている。何故理解し、知識を持っているのかは謎である。

「ここは……？」

薄暗くてよく見えないが、かろうじて見えるのは目の前の大きな女性の石像。どうやら自分が生まれたのは、この石像が抱えている器の中のようだ。

つまりこの石像が母親ということだろうか？

そんなことを考えていたら不意に、誰かの声が響いた。

「へえ、今回はずいぶんと可愛いらしい子が生まれたね。白い髪に青い瞳、とても綺麗な色だ」

「え？」

誰も居ないと思っていた部屋から、自分以外の声がかかることに驚いて声のした方を向いてみると、そこには無精髭を生やした黒髪の男が胡散臭い笑みを浮かべてそこに立っていた。

いつからそこに居たのだろうか？ 全く気配がしなかったのは、この男が気配を消しているからだろう。

「自分がたった今生まれたことは理解しているね？」

「……うん」

「よし、それじゃあまずは自己紹介といこうか。と言いたいところだけど、僕は君をどうしようという輩じゃないからあまり警戒しないで欲しいかな」

そう言われて初めて気づいたが、どうやら自分は無意識の内に反撃ができるように手を握り締めていたようだ。

まだ、若干の警戒心を持ちながら体の力を抜いた。

「好戦的なのは嫌いじゃないけどね。まあこんな見るからに怪しい僕が、いきなり目の前に現れたんじゃあしょうがないかな」

全くそのとおりだと思った。生まれたばかりの自分に気配を消しながら近づいてきたのだ、問答無用で殴りかからなかっただけでも感謝してほしいものである。

というかこの男、自分が怪しいと自覚していてこんな真似をするなんて何を考えているのだろうか。

「僕の名前は泉だ。呼びかたは泉かお兄さんとも呼んでくれ」

「おじさんは、ここで何をしているの？」

「……まあいいんだけどね。僕は君のようにこの場所で生まれた子達の世話をしているんだ」

自分がおじさんと呼んだことには特に何も言わず、泉は苦笑いを浮かべながらそう言った。あっさりとおじさん呼ばわりされたことを許したと言っことは、もしかして言われ慣れているのだろうか？

「私みたいにここで生まれた子が他にも居るの？」

「そのとおりだよ。みんなもうこの世界を旅しに行ってしまったけ

どね
「そうなんだ」

自分以外にこの場所で生まれた子というものに、多少興味が惹かれたが近く居ないのならしょうがない。生きていればその内会つこともあるだろう。

「それで君の名前は何というのかな？」

「私の名前……？」

「そう、名前だ」

普通は、生まれたばかりで名前などわかるはずも無いのだが。何故か自分の名前が頭の中に浮かんできた。どうしてそれが自分の名前だと思っただのかはわからないが、自然にその名前を口に使っていた。

「私の名前はハナ」

「栗ちゃんか、それじゃあ自己紹介も済んだことだしそろそろ行くか」

「どこへ？」

「君がこれから住む場所だよ」

目の前の男はやはりどこか胡散臭い笑みを浮かべてそう言った。

「といっても、行くのは僕の家なだけどね」

「おじさんの家？」

「そうだよ。ああそういえば、僕としたことがうっかり言い忘れていた」

「……？」

「おめでとう、さっちゃん。その世界へ。僕は君を祝福するよ」

1話

「さて、まずはこの世界について話そうか」

その後、泉に連れられ泉の家までやってきた。

自分の生まれた建物は、森の中にある小さな神殿のような場所だった。外観は崩れないのが不思議なほどボロボロで、よく今まで形を保っていられたものだ。

泉の家はそんな神殿のすぐ裏にポツンと建っていた。こんな人気の無い森の中に、大きなログハウスが見えた時は驚いた。しかもこのログハウス、泉が一人で建てたというのだからさらに驚きだ。

「この世界にはね、色々な街があるんだ。しかもその数が膨大でね、なんでも街の数は今も増え続けているそうだよ。聞いた話によると気づいたらそこに有って、誰も街が増えた瞬間を見た人は居ないらしいね」

どうやら自分の生まれた世界は、中々に面白そうな世界のようにだ。

「そうそう、面白いことに街と一緒に土地も増える時があるらしいよ。おかげでこの世界の正確な地図を描くことは不可能とまで言われているんだ」

「なんだか面白そうな世界なんだね」

「実際に面白い世界だよ、それで痺ちゃん。こんな世界に生まれた君は今後どうしたい？」

「面白そうだから世界の色々な街を見てみたい」

「即答か、良いねスパッと決めてくれて僕もありがたいよ」

楽しそうなことなら当然興味も沸く。自分の知らない事を知った

時楽しいと感じたので、世界を旅して周るなんてとても楽しそうだ。

「でも一つ問題があるんだ。この世界には魔物が生息していてね、下手をすると1つ目の街に着く前に魔物の腹の中、なんてこともありえる話なんだよ。なんの対抗手段も持たないで世界を旅するなんて自殺行為だ」

「大丈夫、邪魔をされたら殴り倒すから」

「君ならやりかねないね……。それでも一応君のことを鍛えてあげようと思っていたんだけどどうかな？」

「泉が？」

「そうだ、君さえ良ければ僕が師匠になってあげるよ」

確かに自分は生まれたばかりなので戦闘の知識も経験も無い、別に断ることはないだろう。

むしろ願ったり叶ったりだ。魔物に食べられるなんて絶対に御免なので、多少は鍛えておいたほうがよさそうだ。

7

「うん、よろしくお願いします師匠」

「よしわかった。といっても君は既にそこそこ強そうだから、僕が教えるのは基礎部分だけでも大丈夫だと思うけどね」

「そうなの？ 自分ではよくわからないけど……」

「僕は見ただけで、ある程度どのぐらい強いのかわかるからね。君は相当強くなれると思うよ」

割と凄いことを言っている気がするが本当だろうか……？

しかし、泉ならばありえるかもしれないと思ったのでそこは流しておいた。

「それじゃあ夕食にしようか、準備をしてくるから適当にくつろいでいて良いよ」

「うん、ありがとう師匠」

さて何をしていようか。周りを見回してみると、部屋の隅に本棚を見つけた。

その中の興味が惹かれた本を1冊手に取ってみる。夕食が出来るまではこの本を読んで時間を潰していよう。

「準備が出来たよ雫ちゃん。おや、本を読んでいたのかい」

師匠に呼びかけられ気付いたが、自分は結構長い間熱中して読んでいたようだ。

さくさくと読み進められたので、結構なページ数を読んでいた。あまりに集中して読んでいたので、時間があつという間に過ぎていた。

「この本面白いね師匠」

「気に入ったかい？ その本はこの世界に実際に存在する街をモデルに書かれているらしいよ」

「そうなんだ。じゃあ旅をしていればこの本の街に行ける？」

本の中の街が実際にあるという夢のような話を聞いて、期待を込めて聞いてみる。

「運が良ければね。なにせこの世界は広いってものじゃないから知っている街に行くのにも一苦労だ。知らない街に行こうなんて考え

ると、相当運が良くなければ無理じゃないかな」

「なんだ……。師匠はこの本の街に行ったことがあるの？」

「残念ながら僕も行ったことは無いね」

行くのが難しいと聞いて落胆したが、絶対に行けないわけではな
いらしいので旅をしていればそのうち辿り着けるだろう。これは旅
の楽しみが一つ増えた。

師匠の持ってきた料理を覗いてみると、そこには先ほどまで自分
の読んでいた本に出てきた料理と似ている物があった。

「これってさっきの本に出てきたやつ？」

「よくわかったね、作り方が本に書いてあったから作ってみたらこ
れがまた美味しくてね、それ以降料理をするのが趣味になっただら
いだよ」

料理が趣味と聞いて驚いた、この見た目で趣味は料理ですなんて
言われたら思わず笑ってしまいそうだ。というか、実際に笑ってし
まった。

こんなどうみても料理をするとは思えない男が、「趣味は料理で
す」なんて言ったら笑ってしまうのもしょうがないだろう。

「それって、私にも作れる？」

「そうだね、旅をするのに料理のスキルも必要だろうから教えてあ
げるよ」

「楽しみにしてる」

笑ってしまったのを気にもせずに師匠は約束をしてくれた。似合
わない事を言っているのは自覚しているのだろう。

「よし、料理が冷めないうちに食べようか。料理は出来たてが一番

だからね
「

うん
「

「明日から修行を始めるからいっぱい食べておいたほうがいいよ
「

2話

翌日、日も昇らないうちから起こされ軽く朝食を取った後、師匠に連れられ森の中の少し広めの広場に來ていた。

まず最初に魔法を教えてくれるらしい。

それなりの広さがないと危険という理由で、ここまでやって來た正直、あんな朝早くから起こすのは勘弁して欲しかった。

なんでも、修行というのは朝早くからやるもの、と言って無理やり連れ出された。

「それじゃあまずは基本から。魔法というのはイメージが重要なんだ。なんでも良いから魔法というものをイメージしてみようか」

そんななんでも良いと言われても……。

いきなりやったことも無いのにイメージしろだなんて期待されているのか、それとまた単に詳しく説明するのが面倒だったのか……。師匠のことだ、おそらく後者なのだろう。

もっと具体的に説明しろと文句を言っただけだが、起きたばかりで口を開くのが面倒だったのでやめた。

しょうがないので、言われた通りに魔法といものをイメージしてみよう。

魔法といえば昨日読んだ本にも魔法が登場していた。

あの本に出てきた魔法は確か。

「指先に水を集中させて圧縮」

指先が青く光ったと思うと、物凄い速度で圧縮された水が地面に向かって飛んで行った。

まさかいきなり出来るわけがないと思っていたのだが、成功させ

てしまったようだ。

「……驚いたね、1発で成功させるなんてやるじゃないか。まさかあれだけの説明で出来るとは思わなかったよ。それにこの威力は凄いな、生き物に撃つたら軽く貫通しそうだ」

やはりさつきは説明が面倒くさかったただけのようだ、後で1発殴っておこう。

自分が撃つた魔法はかなりの距離、地面を抉っていた。少し威力が強すぎたらしい。

イメージしたのは水の弾丸。手で拳銃の形を作り指先から弾丸を撃ちだす感覚で水を発射してみたが、まさかこんなに威力が高いとは思ってもみなかった。

「それじゃあその調子で、どんどんやっていこうか」
「うん」

次は何をイメージしてみようか。

水の弾丸は、本に出てきたものを真似しただけなので、ここにアレンジを加えた魔法を考えてみるのも良いかもしれない。

そこで、さつきは水を撃ちだしたが、今度は弾丸を氷にしてみることにした。どうせなら先端を尖らせて貫通する力を強くしてみよう。

先ほどのように手を拳銃の形にしようとしたが、これでは手が塞がってしまうことに気付いた。

実戦を想定するのならば、手は自由に動かせたほうが良い。

手を使わずに魔法を撃てるように、自分の正面から魔法を撃つイメージしてみよう。

「君の才能は恐ろしいね、零ちゃん」

時折師匠にアドバイスを貰いながら魔法の練習をしていた時、そんなことを言われた。

「そんなに凄いかな？」

「凄いや。普通はこんなにすぐに、魔法を使いこなすなんて出来ないんだけどね」

そんなことを言われても、出来てしまうものは仕方がない。

自分にとっては、苦もなく簡単に出来てしまうことなので、凄いと云われてもいまいち実感が湧かない。

「これならもう、実戦形式の修行をしても大丈夫かな」

刹那、身体全体が震えるほどの寒気に襲われる。

嫌な予感がして、咄嗟に無理矢理、全力で身体を横に動かした。

「不意打ちは卑怯だと思っよ師匠」

「何を言っているんだい？ 実戦じゃあ敵は待ってくれないよ」

この男、どこに隠し持っていたのかは知らないが、突然殺気と共にナイフを飛ばしてきた。

実戦での不意打ちに対応出来るようにするためなのだろうが、いくら修行とはいえ完全に油断している時に、当たったら只では済まないような物を飛ばしてくるのはどうなのだろうか。

「ごめんごめん、君なら避けられると思ってね。まあこうして避けられたんだから良いじゃないか」

「そういう問題じゃないよ師匠」

「じゃあどうという問題なんだい？」

決めた、絶対に師匠をぶん殴る。

師匠ならば手加減は要らないだろう。いや、手を抜いている暇などないと言ったほうが正しいか。

今の攻撃、間違いなく全力で避けた。

それなのに、頬には薄く切り傷が残っている、完全には避けきれていなかったのだ。

多分、ギリギリ避けられるように計算して攻撃してきたのだろう。これが全力だったら恐らく自分は既に死んでいた。

「殴って良いよね師匠？」

「出来るならね。そうだな実戦形式だから、勝ち負けの条件をはっきりさせておこう。日が落ちるまでに君が僕に1撃でも攻撃を当てられたら君の勝ち。出来なかったら僕の勝ちだ。どうだい？ シンプルでわかりやすいだろう？」

「そんなのどうでも良い、絶対に殴る」

「おお恐い恐い。ちなみに今の攻撃は手加減してあげたけど、次からは本気でいくから覚悟を決めておいてね。殺してはしないけど、多少の怪我くらいはさせるよ」

上等だ、明らかに手加減されていては自分の気が晴れない。

それに本気の師匠と1対1で戦うのはとても面白いだろう。

明らかに自分より強い者の、今すぐにも膝を付いてしまいそうなほどの殺気を前にして、自分の戦闘意欲が高まっていくのを感じた。

「それじゃあ。行くよ！」

強大なる力を持つ、2人の師弟の戦いが幕を切って落とされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7080z/>

無限の世界で旅をする

2011年12月27日23時49分発行